

## 個人の主体性

野田俊作 (大阪)

### 要旨

自我が身体や精神と同じものであるならば  
自我は身体や精神と同じように生滅するであろう  
自我が身体や精神と別のものであるならば  
自我は身体や精神のはたらきをもたないであろう  
(ナーガールジュナ)

### The Subjectivity of the Individual

Individual Psychology assumes that the individual moves its own parts, while Freudian and many other systems suppose some parts of the individual move the whole. We always put the word "individual" on the subjective case of sentences to describe the behavior. This is rather a biological idea than humanistic. From this point of view we can deduce all the basic assumptions of Individual Psychology.

### La Subjekteco de la Individuo

Individua Psikologio alprenas la ideon ke la individuo movas siajn partojn, dum Freuda kaj multe da aliaj sistemoj supozas ke kelke da partoj de la individuo movas la tuton. Ni chiam metas la vorton "individuo"n sur la subjekta kazo de frazoj por priskribi la konduton. Tiu chi ideo estas phi biologica ol humanisma. De tiu chi vidpunkto povas ni dedukti chiuajn bazajn alpreojn de Individua Psikologio.

キーワード :

### 問題の所在

アドラー心理学は、基本前提 (basic assumptions) とよばれる公理系のうえに構築された理論である。基本前提は、経験から帰納された法則でもないし、なんらかの方法で正当性が証明できるような定理でもない。それらは、アドラー心理学の諸原理を統一的に説明するために要請された理論的な仮説なのである。

基本前提を最初に定式化したのはアンズバッハー (Ansbacher, H.L.) である。彼はニューヨーク学派であるが、これとはある程度対立関係にあったシカゴ学派でも、ドライカース (Dreikurs, R.) もモザック (Mosak, H.H.) もシャルマン (Shulman, B.H.) も、アンズバッハーが提唱した基本前提をほぼそのまま受け入れている。

しかし、各前提の重要性の程度については彼らの間に微妙な意見の相違があったようである。たとえば、彼らの著書の中にあられる基本前提の記述順序を見てみると、アンズバッハーは全体論を筆頭におき対人関係論を最後におくが、ドライカースはこれとはちょうど反対に、対人関係論を筆頭におき全体論を最後においている。早く記述するものほど重要であると彼らが考えていたとすると、アンズバッハーとドライカースのアドラー心理学理解の差を反映しているようで興味がある。さらにおもしろいことに、ドライカースの生徒であるモザックとシャルマンは、アンズバッハーに近い順序で基本前提をならべている (表1 参照)。

それにしても、これら基本前提は、ただ思いつくままに羅列されているだけであって、それら相互間の関係については、あまり検討されてこなかったように思われる。すなわち、これらすべてが必要なのか、これら以外にも必要な前提はないのか、これらの相互間に矛盾はないのか、というようなことについては、過去の研究はあまりみあたらない。

本論文では、これらの基本前提を統一的に説明する概念としての「個人の主体性」をとりあげ、ここから基本前提を説明してみる、主体性 (subjectivity) というのは、創造性 (creativity) といくらか関係する概念である。従来私は、基本前提を、創造性を除く4箇条にまとめてきた。創造性を省略したのは、どうもこれが他の前提とは性格の異なったものであるような気がしていて、同じ平面に羅列することにとまどいがあったからである。今回それを、他の基本前提の基礎をなす、アドラー心理学のもっとも根本的な仮説として再評価しようと思う。

## 個人が精神を使う

臨床心理学には、原理的に次の2つの立場がありうる。

- A. 個人の部分が個人全体を動かす。
- B. 個人全体が個人の部分を動かす。

Aは、もうすこし日常語的ないい方をすると、「心が私を動かす」、「感情が私を動かす」、「本能在私を動かす」、「習慣が私を動かす」、「性格が私を動かす」、「幼児期の心の傷が私を動かす」、「コンプレックスが私を動かす」、「自我が私を動かす」というような考え方である。すなわちこれは、フロイトやユングの立場であり、また一般的な社会通念でもある。

	Ansbacher [1]	Dreikurs [2]	Mosak/Shulman [3]
目的論	2	3	2
全体論	1	3	1
対人関係論	4	1	5
認知論		4	4
創造性	3	2	3

表1 基本前提の記述順位

これに対して、Bがアドラー心理学の立場である。アドラー心理学は、「私が心を動かす」、「私が感情を動かす」などと考える。このときの「私」は、フロイト心理学などでいう「自我」や、あるいはユング心理学などでいう「自己」ではなく、精神をも身体をも含めた個人の全体のことである。

このような「個人 (individual, Individuum)」の概念を、アドラーは、病理学者ルドルフ・フィルヒョウ (Rudolph Virchow) の「すべての部分が共通の目的のために協力するような統一された全体 (eine einheitliche Gemeinschaft, in der alle Teile zu einem gleichartigen Zweck zusammenwirken)」という個人の定義から学んだ<sup>[4]</sup>。

このような意味での「個人」は、生物学的な概念であって、生体 (organism, Organismus) というような言葉に置き換えることもできるし、実際アドラーもその言葉を使っている場合もある。生体は、生存のためにさまざまな器官を使用する。たとえば、ウニはトゲを使用するし、コイはエラを使用するし、ライオンは牙を使用する。同じように、ヒトは精神を使用するのである。ヒトの精神は、ウニのトゲやコイのエラやライオンの牙と同じように、生体が使用する道具なのである。

そうすると、「トゲがウニを動かす」とか「エラがコイを動かす」とか「牙がライオンを動かす」といういい方がおかしいのと同様に、「精神がヒトを動かす」といういい方はおかしいことになる。生体としての、全体としての「個人」は、その部分である「精神」に動かされることはないのである。どんなときでも「個人が精神を動かす」あるいは「個人が精神を使う」のであって、「精神が個人を動かす」ことはないのである。

## 個人は自我や自己ではない

アドラーのいう「個人」は、精神をも身体をも含めた生体の全体であって、心理学的な意味での「自我」や「自己」ではない。それはそもそも精神ですらないのである。また身体でもない。かといって、精神や身体と別に存在するものでもない。要するに、生体としての人間全体のことである。

生体は、ひとつのシステムである。生体システムが存続している間は、自分を存続させる方向にシステム内の諸力が働いている。システム全体を統括し主催する部分は存在しない。各部分が有機的に関係しあって、全体としての動きを作り出しているのである。その全体を仮に「個人」という。

そうした「個人」が、身体的・精神的諸器官を使用している。身体的諸器官とは、筋肉や内臓のことであり、精神的諸器官とは、思考や感情や記憶や意思である。この場合、「使用している」というのは、いくらか比喩的ないい方であって、個人に意思があって使用しているわけではない。「部分がシステムとしての秩序のもとに動きあっている」というのがいくらか正確ないい方であろうが、これでは煩雑なので、仮に「個人が部分を動かしている」あるいは「個人が部分を使っている」と、擬人的・比喩的に表現しているのである。

個人を統轄し主宰するものとしての心理的な「自己」や「自我」は存在しないのである。システムが全体として動いているのである。どれかの部分が他の部分を動かしているわけではない。たとえとして、昔風のゼンマイ動力の振り時計を考えてみよう。ゼンマイが時計に動力を提供している。これを日常語では「ゼンマイが時計を動かす」ということもある。「動かす」という単語には、1) 動力を提供する、という意味と、2) 全体を統轄し主宰する、という意味の両方が含意されているが、後者の意味はこの場合なりたたない。ゼンマイは、単に動力を提供している

だけであって、時計全体を統轄し主宰しているわけではない。すなわち、時計がもっている秩序は、ゼンマイによってもたらされているわけではない。あるいは振子やそれと連動する歯車がゼンマイが提供する動力を調整しているが、それでは振子が時計全体を統轄し主宰しているかというと、そうでもない。ゼンマイがほどけてしまえば、振子も歯車も動くことはできないのである。時計は、ゼンマイや振子や歯車や歯車の軸受けや針や文字盤や、そうしたもののすべての相互作用によって秩序をもった運動を維持するのである。これを「時計の各部分が相互に作用しあいながらシステムとしての秩序を保って動いている」といいあらわすこともできるが、このいい方ではあまりに煩雑なので、「時計のシステム全体が各部分を動かす」ということもできるし、あるいは「時計のシステム全体が各部分を使っている」と、いくらか擬人的にいいあらわすこともできる。アドラー心理学は、人間について、ちょうどこれと同じように考えているのである。

## 主体性の概念

主体性 (subjectivity) というのは、「個人が精神や身体を動かす」というように、「個人」を文の主語にして考えることである。逆にいうと、「精神が個人を動かす」というように、個人を文の目的語におかないことである。

主体性という用語には、この場合は、たとえば西田哲学や実存主義哲学で使われるときのような倫理的な思い入れはまったくない。主体性という、まるで個人が意思のある精神的存在であるかのようにみえるかもしれないが、そういう含意はないのである。個人は、あくまで生体システム全体につけられた名称であって、それ自体は精神的なものではなく、精神をも身体をもすべて含めた生物的存在なのである。それを言語でもって記述する際に、「部分がシステムの相互作用を保って動きあっている」という無主語的な煩雑ない方を避けて、「個人が部分を動かす」というように「個人」を主語にしていうのが、個人の主体性の定義である。これは文法的な概念であるといってもよい。あるいは、主語性 (Subjectivity) という方がふさわしいかもしれない。

## 個人の主体性と基本前提

### 1. 全体論

個人が主体であるということを認めれば、自動的に全体論を認めたことになる、すなわち、部分が主語になって個人を動かすことを否定したのであるから。

### 2. 目的論

目的論は、個人が動くとき、ある方向性をもっていることを意味している。生体システムである個人は、自分自身と環境とを自分のために改変する。無生物も動くことがあるが、生物が無生物と区別されるのは、自分自身の目的にそって自分自身ないし環境を改変する方向性をもって動くことによってである。この場合の「目的」というのは、比喩的な表現である。生物が「意志的に」ある目標を選択し追及しているのではない。システムである生体が、システム自体の生物学的な意味での自己一貫性の保持の方向に動くことを、仮に「個人が目的に向かって動く」と、比喩的にいいあらわしているにすぎないのである。

そのような意味での目標追求に際して、道具として身体や精神が使用される。「使用する」というような表現は、容易に擬人化され、意志的な自己なり自我なり無意識なりが存在して、それ

が精神や身体を意図的な計画にもとづいて使用しているかのような錯覚を人にいだかせる。しかし、そうではないのである。ここでは、生物学的、あるいはほとんど物理学的な意味での、個人の「運動」の法則を言っているのもであって、そこに心理学的な思い入れをしてはならない。心理学の基礎論を考えるとときに心理学的な思い入れを先行させることは論点先取であって、それでは厳密な科学的理論の構築が不可能になってしまう。

ここでいう目的は、認知的なものであるとはかぎらない。生体というかぎりは、アメーバのような単細胞生物までを射程に入れて考えるわけであり、そうなると、アドラーがいう「仮想的目標 (fictional goal)」とか、私という「予想」とかのような、認知的なものではなくて、生体が自分自身を変化させ、あるいは環境を変化させるときの方向性をいうことになる。

もっとも、人間の場合については、この方向性は認知的な目標と一致しているとアドラーは考えていた。ただし、この場合に認知的というのは、意識的であることを意味していない。むしろ、多くの場合無意識的であるとアドラーは考えていたのであるが、無意識的な目標がなんであるのか、そもそもそのようなものが存在するのかどうかは、無意識的であるだけに証明不能である。科学的であるためには、そのようなものを前提せず、「生体としての運動の方向を意識的に認知し変更することが可能である」という事実だけを認めておけばよい。認知される前にその方向性が無意識的に自覚されていたのかいないのかについて、アドラーは自覚されているという意見であったように思われるが、私は自覚されていたかされていなかったか不明であるという立場である。しかし、この対立は本質的なものではない。自覚されていようがいなかろうが、それとはかわりなく生体としての運動の方向性は常に存在するわけであるし、またたとえ無意識的に自覚されていなくても、なんらかの契機（たとえば心理療法）によって意識的に自覚でき、さらに意識的に自覚することを通じて目標を変更できるという可能性さえ承認しておけば、理論上なんら問題はないのである。

ただ、臨床実技の上では、モザックが提唱した「基本的信念」、すなわち「自己概念」「自己理想」「世界像」、という認知的な概念でライフスタイルを定義する方法は、再検討する余地がある<sup>[5]</sup>。なぜなら、ライフスタイルは無意識的にさえ認知されていないものであるかもしれない。そうであるとする、そのような言語的な形式であらかじめ存在するものではないことになる。仮にモザックの様式で基本的信念を診断しても、それは生体の運動パターンを診断時点で言語化したものであって、診断以前にそのような言語的な形式で存在していたものではないことになる。これについては、稿を改めて検討することがあろうと思う。

### 3. 認知論

生体は、かならずしも自分自身なり環境なりの物理的状況に反応して運動するわけではない。たとえば、人間は放射線を認知できないので、放射線が照射されても行動を変えない。認知ではじめて行動を変えるのである。こういう意味で、個人は主観の世界に生きていることになる。生体は自分の感覚能力を使用して自分自身と外界を知り、人間の場合はさらに言語能力を使用してそれに意味づけし、それにたいして反応して行動するのである。そういう意味で、アドラー心理学は主観主義的であり認知論的である。アンズバッハーは、このことについて「現象学的」という用語を用いるが、これは適切ではないと思う。

個人の主体性の立場から見ると、個人が認知や言語を使用するのである。人間については、認知機能とはすなわち言語機能であるとアメリカのアドレリアンたちは考えているようであるし、私もこれに賛成である。人間は、認知されないもの、すなわち言語化されないものを使用できないのである。認知された世界が個人の世界であり、その世界のなかで個人は主体的でありうるが、その世界の外側、認知されない世界、言語化されない世界においては、個人は意味のある行動を

とることができず、したがって主体的でない。ヴィトゲンシュタイン (Wittgenstein, L.) がいうように、「私の言語の限界が私の世界の限界 (Die Grenzen meiner Sprache bedeuten die Grenzen meiner Welt.)」<sup>[6]</sup>なのである。

#### 4. 対人関係論

生体が運動するのは、自分自身と環境を改変するためである。すなわち、「個人は自分の精神や身体を動かして、環境を改変する」のである。環境というのが、主として人間環境であるというのも、アドラーが指摘したところである。すくなくとも臨床の場で話題になる環境は、すべて人間環境である。となると、「個人は自分の精神や身体を使って他者を改変する」といいなおしてもよい。すなわち、すくなくとも臨床で話題になることがらに限っていえば、すべての人間活動は対人関係であり、対人関係であるとは他者を操作し支配する運動のことである。

理論的にはアドラー心理学は、人間は他者を操作し支配しないではおれないことを認めている。しかも、思想的には他者を支配しない生き方を提唱していて、ここにひとつの矛盾がある。これについては稿を改めて書かなければならないが、要は、ひとつには共存共栄的な相互操作の道を探ること、ひとつにはいかなる善行も相手を操作することを目的とし自分自身の利益を図ることを目的としているということを知覚して、たえず自己点検すべきことであることを、アドラー心理学の思想は提唱しているのである。

#### 5. 場の理論への拡張

前述したように、個人の主体性を認めると、「Xが個人を動かす」という言い方いっさいをやめ、常に「個人がXを動かす」という言い方で個人の運動を記述しようとすることになる。この場合のXは、個人の部分、たとえば精神や身体、であっていいのであるが、環境であっていい。個人が主語の位置にありさえすれば、「個人が自分自身を動かす」であって、「個人が環境を動かす」であって、いずれも個人の主体性の要請を満たした文法形式である。

そこでたとえば、「過去の体験が現在の個人を動かす」というようにはアドラー心理学は考えないのである。「現在の個人が過去の体験を使う」というように考える。あるいは、「親の働きかけが子ども個人を動かす」とも考えず、「子ども個人が親の働きかけを使う」というように考える。

この場合に、さしあたっては、物理的実在としての環境世界のできごとではなく、主観的・認知的な世界のできごとである。過去の体験そのものは、どのように想起しどのように意味づけようとも、物理的現象としては変わるわけではない。しかし、ある局面である体験を想起するかないか、想起したとしてどう意味づけるかは、現在その個人が自分自身と周囲の環境とを操作するためにおこなわれているのである。したがって、その体験の記憶を使って、個人は他者を現実的に操作しようとしているのである。

あるいは、「他者の行為が個人を動かす」わけではなく、「個人が他者の行為を使う」のであるが、これもさしあたっては主観的・認知的なできごとである。しかし、個人が他者の行為を主観的にどう意味づけるかは、その個人のその他者への対応に反映するので、それに引き続く他者の認知や、さらには行為に影響を与えるであろう。たとえていえば、子どもを愛することができない親が神経症的な子どもを作ったのか、神経症的な子どもが子どもを愛することができない親を作ったのかは、いずれともいえないのである。こうして、個人の行動は、周囲の他者との間に作りだされる対人関係システムの一部となって、個人の心理だけからは説明できないことになる。このような考え方を、モザックやシャルマンは「場の理論 (field theory)」とよんでいる。

## まとめ

このようにして、基本前提はすべて個人の主体性という公理の系として導き出せる。個人の主体性という概念を認めるかぎり、全体論・目的論・対人関係論・認知論のいずれもが、その論理的な帰結になるので、ひとつとして否定することができない。逆にいうと、どれかを否定することは、個人の主体性という大前提を否定しているというのと同義である。たとえば、原因論を認めて、「子ども時代の育児のあり方が大人になってからの行動様式を決定する」と主張するとか、要素論を認めて、「自分で自分の感情をどうしようもない」と主張すれば、ただちに個人の主体性を否定したことになるし、アドラー心理学を拒否したことになる。

最初に述べたように、「個人の創造性」という概念に、私は疑問を感じていた。それは、この概念があまりに人間主義的 (humanistic) であって、擬人的・比喩的に人間の人間性を論点先取していたからである。アンスバッハーは、「人間の創造性とは、自由意志による選択が決定因であり、遺伝的、環境的諸要因が従属的であるようなものであるとみなすことである。自然の状況における動物たちの行動は、本能的に決定されている」と述べているが<sup>[7]</sup>、このように創造性というのは、人間心理と動物一般の行動様式との隔絶をあらかじめ前提にした概念なのである。これにたいして、「個人の主体性」というのは生物学的な概念であり、人間学的な先入観をなにももっていない。したがって、動物一般の行動についての説明がまずあって、その特殊な形態として人間の心理を説明できるようになり、生物学と医学との連続性が確保できる。

アンスバッハーやドライカースがアドラー心理学の基本前提をまとめあげていた時代は、人間主義 (humanism) の全盛期であって、彼らはアドラーを人間主義心理学の先駆者として位置づけたかったようである。たしかにアドラー心理学は、思想的にはラディカル・ヒューマニズムに分類されるべきであろう。しかし、理論的には、人間主義はあまりに反科学的であり、理論的なエレガントさや思想的な清潔さに欠ける。人間主義のもつ問題点を克服して、より科学的で厳密なアドラー心理学理論を構築するためには、個人の主体性という生物学的な基本前提を受け入れて、そこから一元的にアドラー心理学理論を再検討してみる必要があるように思っている。

## 文献

- [1] Ansbacher, H.L. : "Summary of Alfred Adler's Individual Psychology", in "An Adlerian Resource Book", North American Society of Adlerian Psychology, Chicago, p.1.
- [2] Dewey, E.A. : "Basic Applications of Adlerian Psychology", CMTI Press, Coral Springs, 1978, pp.1-2.
- [3] Mosak, H.H. and Shulman, B.H. : "Introductory Individual Psychology", Alfred Adler Institute of Chicago, Chicago, 1967, p.4.
- [4] Adler, A. "Über den nervösen Charakter", Fischer, Frankfurt a.M.,1973 (original 1928), p.25.
- [5] Mosak, H.H. : "The Psychological Attitude in Rehabilitation", 1950, in Mosak, H.H. : "On Purpose", Alfred Adler Institute of Chicago, 1977, pp.52-54.
- [6] Wittgenstein, L. : "Tractatus Logico-Philosophicus", Routledge & Kegan Paul, London, 1922, p.148.
- [7] Ansbacher, H.L. : "Individual Psychology", in Ariety, S.ed.: "American Handbook of Psychiatry", Basic Books, New York, 1974, vol 1, p.784.

## 更新履歴

2012年9月1日 アドレリアン掲載号より転載